

# 新天皇陛下と即位の礼の装い

学習院女子大学名誉教授 増田 美子氏



新天皇陛下が即位され、いよいよ令和の時代が始まった。今上天皇は、皇太子時代に学習院女子大学で何度かご講義され、役職者であった私も、数回昼食会に同席させていだいたことがある。

まさしく拙稿を謹呈させていただいた。殿下は、丁寧なお言葉と共に、返礼として殿下の玉稿までご惠贈くださったのである。

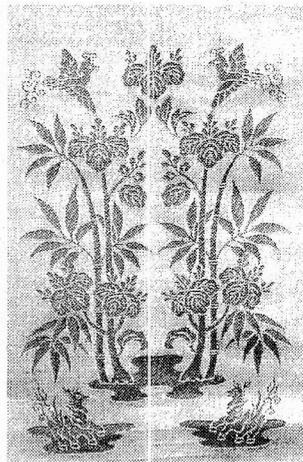


図2 近代の桐竹鳳凰に黄楮染御袍(ころも)

麒麟文

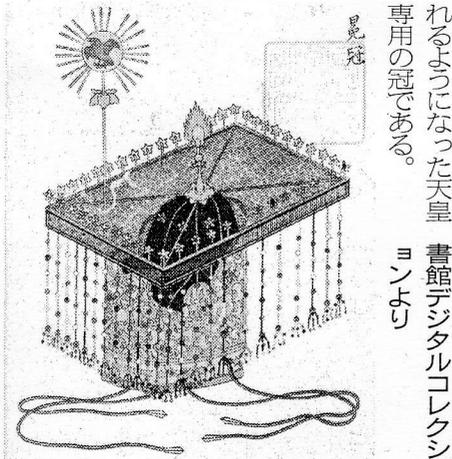
私がかも専門の交通史に関する論文の中で、私が興味を持ちそうなお品(ぎっしや)の文様を選ばれてのものであった。このような細やかなお心遣いをしてくださった方が即位されたら、これからの私たちが安寧・平和を祈り続けていくことへの安堵(ど)感には限りなくある。

図1 大正天皇の即位の礼の束帯姿。梅戸在貞画、大正時代、筆者所蔵図版より



黄楮染御袍は平安前期に天皇の中礼服として定められたもので、中国皇帝などにもその用例は見当たらず、日本独自のものである。黄楮染は楮(はぜ)と蘇芳(すおつ)で染めた黄赤みを帯びた茶色で、桐竹鳳凰文(きりぎりす)を織り出している。この文様は天皇にしか許されない。鳳凰は梧桐(あおぎり)の木にしか止まらず竹の実しか食べないという中国の故事に由来しており、鎌倉時代に聖君の時に現れるという麒麟(きりん)を加えてその意味をより強固なものにした。

束帯は、平安中期頃に成立した中礼服(ちゆうりふ)である。元旦(げんげん)や通常儀礼の際の装いである。一般の冠は、(えい)が後ろに垂れ下がる垂纓冠(すいりゅうかん)であるが、立纓冠は纓が高く立つ。これは近世以降に見られるようになった天皇専用の冠である。



冕冠

実はわが国では、即位などの最も重要な儀式に着る大礼服(たいりふ)は、冠(かん)が3のものに代わり、裳(も)の下から白袴(しろはかま)が覗くこと以外は、ほぼ同様の姿であった。



図4 中国古代皇帝の袞冕十二章。日本の天皇の大礼服は、冠が3のものに代わり、裳の下から白袴が覗くこと以外は、ほぼ同様の姿であった。

江戸時代最後の孝明天皇即位の時まで着用され続けてきた。しかし明治天皇即位の礼に際して、袞冕十二章以下の礼服は中国的でありすぎるという理由から、平安時代から中礼服として用いられていた束帯を大礼服に格上げして即位の礼の装いとされたのである。以降、大正、昭和、平成と束帯が継承され、いよいよ令和の即位の礼を迎えることとなった。私としては歴史を

増田美子(ますだ よしこ) 昭和19年2月20日生まれ。津山市出身。服飾史学者、学習院女子大学名誉教授。学習院女子大学大学院研究科長などを歴任。主な編著書『日本衣服史』(吉川弘文館)『葬送儀礼と装いの比較文化史』(東京堂出版)など。

